

## ●第 88 回日本生理学会大会のご報告

第 88 回日本生理学会大会は、平成 23 年 3 月 28 日-30 日、パシフィコ横浜・会議センターで、第 116 回日本解剖学会総会・全国学術集会との合同大会として開催するために準備していました。しかし、3 月 11 日に発生した、東日本大震災のために、大会の開催を中止し、Journal of Physiological Sciences の誌上発表としました。余震が続いていたこと、放射能汚染が拡大していたこと、電力不足のための節電が呼びかけられていたこと、同時期に開催予定の学会が中止を決めたことなどから、日本生理学会会員の安全を第一に考慮して中止いたしました。

この合同大会は、第 28 回日本医学会総会が東京で開催されるのに合わせて計画され、これまで経験のない合同開催を目指しました。特に、日本生理学会大会は、教育で連携している都内の 4 私立医科大学・医学部（昭和大学医学部、東邦大学医学部、東京医科大学、東京慈恵会医科大学）が当番校をお引受することになり、大会長代表として、東京慈恵会医科大学・細胞生理学講座の栗原敏が指名されました。大会長は、竹森重（東京慈恵会医科大学）、本間生夫（昭和大学医学部）、久光正（昭和大学医学部）、高松研（東邦大学医学部）、有田秀穂（東邦大学医学部）、小西真人（東京医科大学）、金子清俊（東京医科大学）の各教授です。

第 116 回日本解剖学会総会・全国学術集会の会頭は内山安男教授（順天堂大学医学部）、副会頭は坂井建雄教授（順天堂大学医学部）でした。

合同大会のテーマは、“生命科学の未来をひらく一構造と機能の統合をめざして”としました。

合同大会を開催するにあたって、魅力あるプログラムを作る、特別講演者を選定する、それぞれの学会の特別企画を尊重する、合同懇親会を開催する、トラベルアワードを準備する、参加登録はそれぞれの学会として登録し、参加登録者の登録費入金人数の割合で損益の配分を考えるなどの会計処理の規則を定める、会場はアクセスがよく一体感を感じることができる快適な場所とするなど、基本的合意事項を決めて計画いたしました。

### (1) 大会参加登録者

日本生理学会と日本解剖学会の大会参加者と内

訳は、表のとおりです。日本生理学会は、会員、非会員、大学院学生、学部学生など含め、1,214 名の方が登録しました。非会員のシンポジストや学部学生は参加登録費は無料でしたので、実際に入金された方は、1,188 名でした。また、合同懇親会には、222 名の方が申し込まれました。日本解剖学会は、参加登録者が 999 名、入金者は 984 名、懇親会申込者は 287 名でした。

参加登録費の入金者比率は、日本生理学会が 54.7%、日本解剖学会が 45.3% でした。損益はこの割合を使って配分することにしました。

### (2) プログラム

合同大会のプログラムと演題数は以下のとおりです。

一般演題、1,117 題（学生セッション 58 題）（一般演題の中から、日本生理学会賞 1、入澤宏・彩記念若手研究奨励賞 4、入澤彩記念女性生理学者奨励賞 1 を選出する）

(i) 公募シンポジウム、48 題（この中で、企業の支援を受け、企業名をシンポジウムにつけることができる冠シンポジウム 18 題）

(ii) スポンサーシンポジウム、1 題

(iii) 特別講演、3 題

(iv) 記念講演（named lecture）、2 題

(v) 合同教育シンポジウム、合同研究費シンポジウム、合同日中韓シンポジウム、各 1 題

(vi) 教育委員会主催：解剖学・生理学モデル講義

(vii) 合同研究倫理・男女共同シンポジウム

(viii) 入澤宏・彩記念 JPS 優秀論文賞シンポジウム

(ix) 平成 22 年度日本解剖学会奨励賞受賞講演

(x) ランチョンセミナー、8 題

日本解剖学会との協力のもとに、魅力あるプログラムを編成するにあたり、プログラム委員会（加藤總夫委員長）が積極的に活動し、大変、内容の濃いプログラムになりましたが、実現せず残念でした。今後は、日本生理学会大会の折に、日本解剖学会との合同シンポジウムを継続的に企画することなどを申し合わせました。

## 参加申込者集計

区分	日本生理学会	日本解剖学会
会員参加登録(12,000円)	704	540
会員参加登録+懇親会(18,000円)	100	180
非会員参加登録(15,000円)	42	7
非会員参加登録+懇親会(21,000円)	2	1
非会員シンポジスト参加登録(無料)	19	11
非会員シンポジスト参加登録+懇親会(無料)	51	27
博士大学院生参加登録(3,000円)	132	96
博士大学院生参加登録+懇親会(8,000円)	7	33
修士大学院生参加登録(3,000円)	61	25
修士大学院生参加登録+懇親会(6,000円)	4	4
学部学生参加登録(無料)	31	30
学部学生参加登録+懇親会(無料)	58	37
シニア会員参加登録(3,000円)	-	3
シニア会員参加登録+懇親会(11,000円)	-	4
会員参加登録(15,000円) *(事前締め切り後、当日締めで申し込み)	3	4
修士大学院生参加登録+懇親会(8,000円) *(事前締め切り後、当日締めで申し込み)	-	1
合計	1,214	999
	重複やキャンセル	-26
		-15
入会者数合計	1,188	984
比率	54.70%	45.30%

日本生理学会	大会参加				懇親会参加				
	金額	登録者数	計	入会者数	金額	申込者数	計	入会者数	入金額
会員	12,000	804	9,648,000	794	6,000	100	600,000	96	576,000
非会員	15,000	44	660,000	39	6,000	2	12,000	2	12,000
非会員シンポジスト	無料	70	0	70	無料	51	0	51	0
博士大学院生	5,000	139	695,000	132	3,000	7	21,000	6	18,000
修士大学院生	3,000	65	195,000	61	3,000	4	12,000	4	12,000
学部学生	無料	89	0	89	無料	58	0	58	0
会員当日参加登録 (事前締め切り後、当日締めで申し込み)	15,000	3	45,000	3	-	-	-	-	-
合計		1,214	11,243,000	1,188		222	645,000	217	618,000

日本解剖学会	大会参加				懇親会参加				
	金額	登録者数	計	入会者数	金額	申込者数	計	入会者数	入金額
会員	12,000	720	8,640,000	713	6,000	180	1,080,000	180	1,080,000
非会員	15,000	8	120,000	4	6,000	1	6,000	0	0
非会員シンポジスト	無料	38	0	38	無料	27	0	27	0
博士大学院生	5,000	129	645,000	126	3,000	33	99,000	33	99,000
修士大学院生	3,000	29	87,000	28	3,000	4	12,000	4	12,000
学部学生	無料	67	0	67	無料	37	0	37	0
シニア会員	5,000	7	35,000	7	6,000	4	24,000	4	24,000
修士大学院生参加登録 (事前締め切り後に申し込み)	5,000	1	5,000	1	3,000	1	3,000	1	3,000
合計		999	9,532,000	984		287	1,224,000	286	1,218,000

入金総額	22,207,000
------	------------

## (3) 収支明細書

第88回日本生理学会大会の収支は、別表の収支明細書とおりです。

## (i) 収入

a. 収入は参加登録費が最も多く、当日登録費を含めて11,001,000円。

b. 寄附金は、日本製薬団体連合会からの5,000,000円と企業からの寄附の合計が8,800,000円。その中から、大会中止によって返金した寄附金が2,950,000円。差引額5,950,000円のうち、日本生理学会の収入分(按分比54.7%分)は3,243,710円。

c. 広告収入として、2,185,000円。抄録集に広告を掲載したので返金はなし。日本生理学会分として1,195,195円が広告収入。

d. 共催費はランチョンセミナーの開催費で、大会が中止になったために返金した後の残金が200,000円で、日本生理学会分が、109,400円。

e. 企業展示(40小間)はなかったため収入はなし。

f. 受取利息は2,068円。

g. 預かり義援金は、懇親会費のうち義援金分として寄附した方の寄附金で、88,000円。

h. 借入金日本生理学会からの補助金で、1,000,000円。

収入合計 16,639,373円

## (ii) 支出

a. コンベンション会社への支払い、8,036,980円。

b. その他の経費として、打ち合わせのための会費、205,525円。

c. 現金書留代(62,230円)、振込手数料(29,245円)

d. 監査・申告料 210,000円。

e. 法人税などの支払い分116,500円。

f. 懇親会費の一部(88,000円)は同意を得て義援金口座へ。

g. 日本製薬団体連合会からの寄附5,000,000円のうち、3,000,000円は第89回日本生理学会大会に使用することを条件として返金不要となったの



1,000,000 円を寄附.

支出合計 13,748,480 円.

収支差額(収入合計-支出合計)は, 2,890,893 円となり, これを日本生理学会大会口座へ入金した.

以上が第 88 回日本生理学会大会の収支報告です. 東日本大震災で大会開催が中止となりましたが, パシフィコ横浜・会議センターの会場費, ホテルの予約などに関するキャンセル料は発生しませんでした. 未曾有の大災害ということで, キャンセル料が発生しなかったことで, 余剰金を残すことができ, その一部を義援金として寄附することができました.

このように, 会員皆様のご理解とご協力を得て, 非常事態に迅速かつ適切に対応できましたことを心から感謝申し上げます.

第 88 回日本生理学会大会

会長代表 栗原 敏

会長 竹森 重

本間生夫

久光 正

高松 研

有田秀穂

小西真人

金子清俊

## ●第 89 回日本生理学会大会を終わって

信州大学医学部教授, 大会長 大橋 俊夫

医科学研究の手法がこれほど専門・分化した時代であって, 旧来の生理・薬理学的手法だけに固執していたのでは, Nature, Science, Cell などの国際的な超一流誌に論文を掲載するのは極めて困難になりつつあると同時に, 生理学の学問的起源でもある生物現象を体系化付ける研究を心底より評価できるレビュアーがいなくなってしまうのではないかとの危機も感じています. 事実, 最近, Cell の超一流の研究者であるレビュアーから, 研究成果は極めて興味深い, conditioning knock out 動物を用いてその事実を *in vivo* 実験で証明して下さいという返事を頂き, 嘖然とした思いをした経験がありました. 一方, 日本の医師育成システムの変更により, 研修の義務化が徹底されてくると, 医学部出身の基礎研究・教育者は 10 数年も経たないうちに本邦の医学部や医科大学から消え去り, 日本生理学会も変質してしまうのではないかとの危機感を全国医学部長・病院長会議の会長を務めて以来持ち続けておりました.

こうした心的要因がありましたので, 一部の幹事の先生方からはご批判はありましたが, 今回はあえて, 特別講演や外国人の招聘講演などはすべて取り止めて, 松本大会記念講演会と銘打って, 生理学を取り囲む基礎・臨床医学のほか, 関連領域の超一流の研究者や行政官の方々 18 名をお招きして, 研究哲学や実践哲学をご披露していただき,

本大会に参加された皆様自らが自分の研究の意味や意義付けを深く洞察し, 自分の研究の最終目標を明確にさせていただく機会を作ってみました. 日程の関係上, 必ずしも多くの先生にはご参加いただけなかったことは残念でしたが, 講演内容はいずれも私の意図に十分答えていただけるものばかりで, 私自身が大変感激致しました. 特に京都大学の成宮周教授からいただいた「生理学は体系化を焦るあまり, 単純化をしすぎていないか, もう少し人間, 臨床に利用できる研究もすべきではないか」とのご意見や, 東京大学の永井良三教授(現自治医科大学学長)からいただいた「生理学はその学問の本来の起源から考えて, 生物体あるいは人体の多様性を科学的に実証できる領域の研究も担当すべきではないのか」とのご指摘は, 真に的を射しており, 私共が日常忘れがちになっていた研究・教育の最終目標を再考するに十分なご講演であったと感銘を受けました.

今回の学会を開催する上で, 理想の学術的プログラムを実施したいという思いとそれを実施に移すための経済的裏付けのバランスは, 大会長が苦勞する最大の課題であることを再認識致しました. これは昨年より「人格なき社団」が大会を運営するという方針の切り替えが行われ, 東日本大震災のために第 88 回大会が誌上開催となり, 実質的には初めての「人格なき社団」が運営する大会と

なったことにこの苦勞の要因は起因していると思えます。従前のように学会運営企業に運営のかなりの部分をお任せするのでは大赤字が想定されましたので、この方面でも「医学部学生と医学部の基礎系教員、事務職員の多大なるご協力を得て」実施しようと新機軸を計画・立案はしたものの、前例が全くないために悪戦苦闘の連続でした。しかし、山梨大学の教員の先生方のご支援を得、参加の皆様のご協力もいただいたお蔭でどうにか大過なく大会を終えることができました。この場をお借りして皆様のご協力・ご支援に深く御礼申し上げます。

それ以外に第89回大会の新機軸として、(1)医学部学生の参加は無料とし、学会を開放し、将来の生理学研究・研究者の人材の育成を企画したこと、(2)男女共同参画、生命倫理委員会など他学会と合同で企画・運営したシンポジウムへの他学会の先生方の参加費は無料としたこと、(3)大会の主旨「多分野との交流・連携を訪ねて生理学の新しきを知る」にのっとり、日本微小循環学会、日本リンパ学会、日本発汗学会、日本体力医学会、日本組織細胞化学会、日本脳神経外科学会等の連携シンポジウムを企画・運営したこと、(4)ランチョンセミナーの学会特別企画として、機器展示企業の中

から複数の企業に依頼して、新商品の紹介と研究への応用などを中心に説明していただくプログラムを企画・実施したこと、(5)ランチョンセミナーの昼食はすべて同じものとし、信州と甲州の代表的な駅弁を中心に日替わりで、毎日大会本部の責任で用意したこと、(6)会員懇親会とそれに引き続く“信州の自然と文化と伝統を楽しむ夕べ”を企画・実施したこと、(7)ポスターセッションの中から、優秀な若手の発表を中心に約30題を複数の審査委員の先生に選考していただき、表彰したこと、(8)大会期間翌日の日曜日に、信州大学、山梨大学、信州大学大序共同参画委員会と共催で市民公開講座「医療人を目指す女性のために」(午前の部)、「あすを担う医療人育成のために」(午後の部)を開催し、約1,100名の中高生ならびに市民の参加をいただいたこと、などを挙げるができるかと思えます。

最後になりますが、今回の大会にいただいた総演題数は875題にのぼり、当日参加の方を含め、延べ総数はほぼ1,500名になりました。さらに従来からの課題であった大会事務手続きすべてを一冊のファイルに整理し、次回大会長 横浜市立大学の石川義弘教授に引き継ぎができましたことを合わせてご報告させていただきます。

## ●第 89 回日本生理学会大会ポスター賞受賞者一覧

演題番号	発表者氏名	演題名
1PJ-4	沼田 朋大	TRPA1 チャンネルの酸素感受機構の解明
1PJ-39	村山 尚	1 型リアノジン受容体の S4-S5 リンカーはチャンネルゲーティングを調節する
1PJ-48	秋田 天平	マウス・アストログリア細胞における低浸透圧刺激による細胞容積感受性外向整流性アニオンチャンネル (VSOR) 活性化の Ca <sup>2+</sup> ナノドメインを介する成分
1PJ-67	繁富 英治	アストロサイトにおける新規カルシウムシグナルとその LTP における役割
1PJ-77	村越 秀治	海馬神経細胞上のスパイン内での Rho GTPase 活性化イメージング
1PJ-104	西野 恵里	蛍光分光及び電気活動の同時計測を目指した蛍光パッチ電極法の開発
1PJ-118	金 美花	酸素による動脈管リモデリング
1PJ-158	Yang Shu-Chuan	Hepatic circadian-clock system affected by the insulin resistance
1PJ-162	佐藤 麻紀	肥満者における体温調節応答とホルモンの季節性変動
1PJ-175	征矢 学	ハムスター口腔粘膜の単離メルケル細胞における TRPV4 チャンネル発現の検討
1PJ-197	木場 智史	心不全ラット延髄中の活性酸素は中枢性交感神経賦活を過剰に増幅する
2PJ-7	細木 誠之	NHE 阻害剤による胃がん細胞株の増殖抑制機序
2PJ-16	海住 太郎	Zymosan を投与した RAW264 細胞におけるファゴソームの pH 変動
2PJ-28	加治屋勝子	血管異常収縮のシグナル伝達における膜ラフトの構造と機能の解析
2PJ-57	藤村 篤史	サイクリン G2 は低酸素により誘導される悪性神経膠腫の浸潤を促進する
2PJ-72	程 彦	Cyclin G2 は神経突起の分化を制御する
2PJ-91	岸 博子	血管平滑筋異常収縮を担う SPC/Fyn/ROK 経路における Fyn 下流候補分子の絞込みのための、自動細胞イメージングシステムによる、ハイスループットかつ定量的なスクリーニング系の開発
2PJ-114	前田佐知子	発生期心拍動開始におけるサルコメア構成蛋白の発現
2PJ-131	姫野友紀子	洞房結節細胞における歩調取りリズムへの細胞内カルシウム濃度変化の寄与は小さい—電位固定法下での自発的カルシウム放出記録からの考察
2PJ-143	熊谷 駿	プロスタグランジン E <sub>2</sub> 受容体 EP4 を介したシグナル伝達が動脈硬化に先行する内膜肥厚で役割を果たす可能性の示唆
2PJ-168	相馬 祥吾	ラット一次視覚野におけるコリン作動性ゲイン調節
2PJ-182	玉利 健悟	IL-6 受容体阻害による外傷性嗅覚障害マウスの嗅覚回復
3PJ-2	多田 聡	STAT3 コンディショナルノックアウトマウスでは脾臓マクロファージの赤血球貪食亢進による貧血が見られる
3PJ-29	五十里 彰	マグネシウムによるクロロデン-16 のリン酸化と細胞内局在の調節
3PJ-62	中西 康彦	胎仔脳の移動細胞におけるカルシウム振動の領域による相違
3PJ-86	中村 渉	給餌予知行動の概日リズム制御機構
3PJ-92	榎木 亮介	タイムラプス共焦点システムを用いた概日カルシウムリズムの時空間解析
3PJ-112	松崎健太郎	暑熱暴露による神経新生と耐暑熱性の加齢による変化
3PJ-122	田淵紗和子	睡眠覚醒調節におけるオレキシン神経—セロトニン神経間ネガティブフィードバック回路の生理的役割の解明
3PJ-139	笹田 周作	人工神経接続を利用した下肢歩行運動の随意制御
3PJ-151	小坂田文隆	狂犬病ウイルスベクターを用いた神経回路解析ツールの開発
3PJ-188	岡部 直彦	新規核酸アナログ, 2Cl-C.OXT-A の脳梗塞治療薬としての可能性
3PJ-195	塚田 信吾	導電性高分子とシルクの複合材による生体電極

## ●日本生理学会編集・広報委員会議事録

日時：2012年3月28日

会場：松本市 ホテルブエナビスタ

出席者：小西真人，上田陽一，尾野恭一，久野みゆき，小林 誠，佐藤元彦，相馬義郎，多久和典子，村山 尚，毛利 聡，渡辺 賢

### 議題（審議・報告）：

#### 1. メンバー交代

2012年度からの新メンバーを委員から推薦した。専門分野，地区などを勘案の上，心当たりの先生に声をかけることとなった。

2. 日本生理学会雑誌に発表するサイエンス論文は，利益相反について明記することになった。

#### 3. 日本生理学会雑誌のEBSCO 掲載が決定

目次が英訳され，本文は紙面のまま掲載される。インターナショナルに発信したい場合は英語表記を併記する。

4. 学会事務局の業務を外部に移転することが検討されており，総会で決定される予定。

以上，2，3，4は会員に周知することが必要である。

#### 5. 日本生理学会雑誌

(1) 発行形態：2012年から奇数月の隔月刊となっている。

サイズは現在 B5 版だが，JPS や他学会雑誌では A4 版化が進んでいるので，今後，A4 版への移行について検討していく。

(2) 表紙：ポスターの図の掲載を復活させる。各号 1 題で 1 年分なので 6 題が必要となる。第 89 回松本大会のポスターから予備を含めて 7-8 題程度選定して発表者に依頼する。表紙はカラーが望ましい。

#### (3) コンテンツ

##### ①継続するコンテンツ

Vision：岡田泰伸先生（その 3），栗原 敏新会長，小西 真人先生

Opinion：早石 修先生，伊藤正男先生，大槻馨男先生，小川靖男先生，廣重力先生，富田忠雄先生，宮崎俊一先生，香川靖雄先生など（小西先生から御依頼いただく）

・以上 2 項目は，職位・研究歴・年齢に関係なく，広く原稿を受け付ける。依頼原稿は生理学会員でなくとも可。

・Vision, Opinion というタイトルは身構えがちなので，これに替る親しみやすい雰囲気タイトルのあれ

ば変更の可能性もあり，要検討。（ちなみに，生化学会雑誌では「atmosphere」，日薬理誌では「Agora」，生物物理では「巻頭言」）

・上記に例として挙げられた大御所の先生方には，その時歴史が動いた瞬間の前後の消息をお書き頂くシリーズとし，将来，書籍として編纂することも視野に入れる。

Science Topics：筆頭著者は生理学会員とする（学会員でない場合は，この機会に入会していただく）。研究の背景が専門外の人にもわかりやすいように，また，サイエンスの内容を充実させた原稿を掲載（～1200 字）。図表 1 個まで（オリジナルと同一ではないものとして著作権の問題を回避），reference 5 個まで（first author のみ，タイトルなし）。本文のスペースが少ないので，タイトルを小さめにするのを検討する。

Awards：大会の学会各賞のほか，ポスター賞，グループディナー（GD）賞，地方会賞などが対象候補。Awards が一体どれだけあるのか，まずは具体的にリストを作成する。賞によって重みづけを加え，大きな賞は経歴などを加えて大きく扱う方針とする。

Afternoon Tea：従来どおり。著者は生理学会員とする。

Education：教育委員会に企画・編集していただく。久野先生から教育委員会へお願いしていただく。

若手のページ：小西先生から，以前より温めていた企画として提案があった。若手の会の先生に編集・広報委員会に入っていただき，企画・編集していただくコーナーとする方向で検討する。

Calendar：発行時点で古くならない学会・セミナーなどの情報とする。

Profile：各委員が地区内の新任教授就任情報を収集して委員会に伝える。

Book Review：従来どおり。

Abstracts：地方会抄録は英文タイトルを併記可とする（EBSCO 掲載によりインターナショナルにアクセス可能となるため）

##### ②中止するコンテンツ

Information：HP のみにて新鮮な情報を提供する。

Hello PSJ：原稿が集まらないので中止とする（ただし、原稿が有れば掲載も可）。

### ③新企画

1) 学会シンポジウムのオーガナイザーにとりまとめと全体の解説を依頼し、シンポジストに発表内容を原則として日本語で解説していただく（800～1200字、reference 含む）。研究の背景・意義が専門外の人にもわかりやすいように、記述をお願いする。図表1個まで、reference 5個まで（first author のみ、タイトルな

し）。招待講演の場合は生理学会員でなくとも可。今大会は予め周知していないので、強制はしない。

2) 学会、大会の各賞受賞者にシンポジスト（上記）と同様な形式で受賞内容について記述してもらうことも検討する。

3) 座談会あるいはインタビュー形式での記事の企画が提案された。現在の巻頭言やオピニオンは多少固すぎるので、もう少し平易に読めるコンテンツの一つとしての位置づけである。ただし、テープ起こしなど実際の作業負担も検討することが必要である。

## ●第 89 回日本生理学会大会（松本大会）の総会での将来計画委員会からの報告（平成 24 年 3 月 30 日）

日本生理学会将来計画委員会委員長

和歌山県立医科大学医学部生理学第 2 講座 前田 正信

1 平成 24 年 3 月 27 日に、平成 23 年度第 1 回日本生理学会将来計画委員会を開催した。

2 文部科学省が「優れた研究医の確保」を「優れた医療人養成」の 3 つの達成目標の 1 つとしてあげている。さらに文部科学省は平成 24 年度予算に「基礎研究医の養成」として 2 億円を計上している。これらは、他学会との協力もあって、これまで日本生理学会が基礎医学の活性化に取り組んできた活動の成果である。（将来計画委員会での報告事項）

3 他学会（日本解剖学会、日本薬理学会等）との交流について協議した。日本生理学会の更なる活性化のために、大会を他学会と共同開催することが重要である。今回具体的な方策として、以下の点を常任幹事に提案した。

①日本解剖学会、日本薬理学会、日本生理学会の 3 学会の学術大会のどれか 1 つに参加登録費を払えば残りの 2 学会大会の参加登録費が無料となるような協定を 3 学会で締結すること。

②合同開催が望ましいが多くの困難もあるので、同一場所・同一時期に行う同時開催でも他学会との交流の目的が達せること。あるいはリレー開催も視野に入れること。上記 3 学会の大会の合同・同時開催を 2015 年の日本医学会総会開催年に行うことを目標とすること。

研究内容の近い日本解剖学会・日本薬理学会との交流の他に連携可能な他学会にも門戸を広げること、共

同開催となる際には生理学会のアイデンティティーを打ち出す必要があること。（将来計画委員会での協議事項）

4 他国の生理学会との共同開催の問題について協議した。

近年研究水準が急激に上昇しているアジア・オセアニアの国々と活発に連携していく必要性を協議した。英国生理学会大会、ドイツ生理学会大会が国境を越えて開催されている現状を考え、日本生理学会大会を北京、ソウル、台北またはシドニーで開催し、翌年その国の生理学会大会を日本で開催してもらうような協定を他国の生理学会と締結することに関して議論したが、時期尚早であるとの意見が多かった。前回の将来計画委員会の議論同様に、日中韓合同シンポジウムを充実させ、アジアの若い研究者を中心に travel grant を充実させ来日した若い研究者に日本の生理学研究室を見学してもらうことで交流を深める必要性で意見が一致した。（将来計画委員会での協議事項）

5 若い生理学会員を増加させる問題について協議した。

若い生理学会員を増やすための魅力ある大会学術プログラムのあり方について、発表形式、シンポジウムの数や発表者の選び方について協議した。学部学生を育て励ましていくようなセッションや、特にコ・メディカル系からの参加を促すために教育になるセッションが必要であるとの意見があった。この問題につ

いて、学術研究委員会や教育委員会とも連携して、対応していくことが確認された。今回、以下の点を常任幹事に提案した。

①生理学会大会においても若手を育てていくためには、一般口頭発表の機会をつくること。

②大会準備のために大会長を早めに決定する必要があること。

③会員の交流の場として全体の懇親会を引き続き実施すること。

④若手から教授まで参加できるような「(生理学の重鎮を講師に迎える)生理学サマースクール」の開催や、「生理学のコールドスプリングハーバー」(分子生物学という新しい学問がコールドスプリングハーバーで創設・発展していったように、若手から教授まで夏休み1ヵ月ぐらい過ごせて自由にディスカッションできる場と雰囲気)を、将来の夢として、日本で作ることも考えること。(将来計画委員会での協議事項)

## ●平成24年度第1回日本生理学会教育委員会議事録

日時：平成24年3月28日10時～13時

会場：ホテルブエナビスタ(長野県松本市)2階会議室

出席者：石松 秀(久留米大)、奥村 哲(静岡理工科大)、河合康明(鳥取大)、鯉淵典之(群馬大)、椎橋実智男(埼玉医大)、中島 昭(藤田保健衛生大)、松田哲也(玉川大)、森田啓之(岐阜大)、森本恵子(奈良女子大)、山下俊一(女子栄養大)、山中章弘(生理研)(五十音順)

欠席者：久野みゆき(大阪市大)、松尾 理(近畿大)

議長：鯉淵典之委員長

書記：奥村 哲、山下俊一

### 【報告事項】

#### 1. 生理学会常任幹事会への報告事項について

報告予定の主要事項は以下のとおり。

・長野大会における教育委員会主催プログラムはモデル講義とMD-PhDシンポジウムを実施する。

・生理学認定エデュケーター制度(仮称)については制度の骨子を作成した。

・今後の生理学会大会における教育関連プログラムの実施方法については現在検討中。

・「新訂 生理学実習書」は近々発刊予定。

・FAOPSの医学教育関連プログラムの当面の連絡係は、元教育委員の渋谷まさと先生(女子栄養大短期大学部)を推薦したい。

#### 2. 日本医学教育学会「基礎医学振興のための大集会」について

本年2月4日に開催された「基礎医学振興のための大集会」に参加し発表を行った鯉淵委員長より報告があった。MD研究者および基礎医学の研究者をどのように育成するかがテーマであったが、参加学会間に温度差があり、医学教育学会で同じテーマのシンポジウムを行うこととなった。この集会に参加した他の委員からは、学部生をどのように育てるかという視点が足

りないという意見があった。

#### 3. 生理学実習書の進捗状況について

震災の影響で遅れている生理学実習書について、南江堂から新しいスケジュールが提示された。11月発刊予定である。

### 【討議事項】

#### 1. 教育委員会主催プログラムの役割分担についての最終確認

教育委員会が長野大会で主催するモデル講義とMD-PhDシンポジウムの最終準備確認が行われた。

#### 2. 今後のアウトリーチ活動について

アウトリーチ活動には莫大な労力を要するので、生理学会が独自のアウトリーチ活動を行うにあたっては、既存の学会のリソースをいかにうまく使うかがポイントである。

一般向けのホームページを開設し、「生理学とは何か」がわかる一般向けの説明を行う。この説明は「一歩一歩学ぶ生命科学」の項目を選択することで可能と思われる。また、一般向けのホームページにはアウトリーチ活動のイベントを掲載するのが良い。ホーム

ページの充実に関して、常任幹事会で教育委員会から編集・広報委員会に要望を出すことになった。

さらに以下のような意見が交わされ、継続審議となった。

- ・講演会等のイベントでは「生理学会後援」を冠することで演者にも生理学会にもメリットがある→「後援」を冠する要件を決める必要がある。

- ・学会の人的リソースを最大限に活用するためにアウトリーチ活動ができる人材の名簿を作るのが良い→事務局がかわる可能性があり実現が難しい。生理研に参加してもらうのが良い。

- ・若手の会のサマースクールは近年参加者が減ってきて模様替えが必要と思われる→若手の会で骨子を作り教育委員会が後援するスタイルが良い。

### 3. 生理学認定エドキュレーター制度について

1) エドキュレーター資格認定(ポスドク、コメディカルを対象)と、2) スーパーバイザー資格認定(シニア向け)を計画しているが、まずはエドキュレーター制度を確実に立ち上げる。

エドキュレーター資格認定は、1) 生理学会の会員であること、2) 生理学会での発表があること、3) 論文もしくは学位(修士または博士)、4) 教育講演等の教育委員会指定イベントへの出席、5) 評議員の推薦書、6) 認定試験による。

資格は5年間有効とし、更新は教育委員会指定イベントへの出席による。

認定試験については、試験委員会を立ち上げて検討する。マークシート形式の筆記試験とし、問題は解剖生理学クリアブック程度の難易度とする。今後、問題をプールしていく必要があるが、出題委員を選考する一方、教育講演の演者には2~3題の作問を依頼するのが良いと考えられる。解剖生理学クリアブックの利用については鯉淵委員長から医学書院に依頼する。

スーパーバイザーとは教員を教育する資格を認定する制度である。スーパーバイザーは学会で認定講演を行い学会役職者の承認により認定する。試験は課さない。必要要件は学会発表と論文とする。

### 4. 生理学会大会教育関係プログラムについて

教育講演は必ず大会本体内で実施し、日本語で10講演くらいを準備する。講演のテーマは「生理学教育コアカリキュラム」に準じ、教育方法やパネルディスカッションも加える。演者には、最新の内容を含みつつ、平易な言葉による講演を依頼する。講演40分、質疑応答10分、休憩10分程度のゆったりとした時間配分とする。

計画にあたっては広報活動と出席管理の方法を工夫する必要がある。

## ● The Journal of Physiological Sciences (JPS) 編集委員会の報告

2012年3月28日松本で国内委員43名のうち19名の出席を得てJPS編集委員会を開催し、JPS編集・刊行の現状と問題点について議論した内容をご報告いたします。

2007年に発足した現在のJPS編集委員会は1/3ほどの委員のご交代がありました。本委員会で5年を迎えました。この間入札を経て2009年第59巻から出版社をSpringerに変更し、電子編集システムを導入し2008年と2009年に本誌に掲載された計118の論文が2010年に160回引用されたので、Thomson Reuters社の2010年のImpact Factor (IF)は1.356となりました。学会事務センターの破綻に伴う出版社の変更などから2000年以来低迷していたIFが本誌史上最高となりましたが生理学系の雑誌では依然中位で一層の向上が急務です。良質の論文を集めさらに発展していけば3.0以上は決して不可能な数字ではありません。

ここまでのIFの上昇は前編集委員長、岡田泰伸先生のご決断で誌名を変更し国際化を目指したことが大きく貢献しました。実際2011年に引用された刊行年を問わないのべ被引用回数は962回、うちトップの210回は米国の著者によるもので、日本の著者による172回の引用を大きく上回っております。ついで連合王国(57回)、中国・台湾(53回)、オーストラリア(51回)、ドイツ(44回)と、誌名変更の目的であった国際化の成果には見るべきものがあります。特に京都における第36回国際生理学会世界大会(IUPS 2009)以降、全世界からの投稿が増えており、2011年1年間の原稿総投稿数は230(委員会時点で未決26篇を含む)のうち日本国内からの投稿は62篇(受理31篇)、日本を除く東アジア67篇(受理10篇)、欧州44篇(受理7篇)、西アジア29篇(受理1篇)、南北アメリカ17篇(受理2篇)、大洋州2篇(受理1篇)となりま

した。なお、IUPS 2009 の Proceedings は SpringerLink (<http://www.springer.com/12576>) からオープンアクセスになっておりますので、ご参照下さい。

これまで学会事務局の尽力で毎年科学研究費補助金の学術定期刊行物助成をいただいて参りました(2010年度 350 万円, 11 年度 250 万円, 委員会時点では未決定でしたが 12 年度は 280 万円)。定期刊行物助成については最近見直しが行われ、2013 年度からは「国際情報発信力を強化する取組を支援する方向で改善」する方針になり、一つの客観的指針として IF がこれまでに増して重要視されると予測されます。内容的にも優れた総説の掲載、斬新なアイデアに基づく原著論文の掲載が IF の向上には不可欠です。総説については複数の先生が執筆をお引き受け下さり、本年後半に刊行の運びになっています。また、編集委員会では統計の使い方について、判りやすい総説を専門家に依頼して連載することが諒承されました。また、現行の Review とは別個に、Focused Review か Hot Topics といったジャンルを設けて、若手研究奨励賞の受賞者に簡潔な原稿の執筆を依頼することが決まりました。編集委員も 1, 2 年に 1 回は論文投稿を義務化すると案が出されています。また、JPS は毎大会毎に Supplement を刊行しておりますが、上述の計算のように Abstract は掲載論文には算定されず、引用回数にはカウントされます。そこで、発表された Abstract を論文として発表される際に、どの雑誌でも結構です、JPS の Abstract を引用していただきたいと存じます。

国際情報発信力という点で現在国内の編集委員 43 名に加えて編集委員会のメンバーになっていただいている国外委員 11 名により積極的に参加していただくため、現在年に 2 回差し上げている刊行状況の報告書

送付に加え、2013 年の IUPS Birmingham 大会で拡大編集委員会を開催する提案がありました。IUPS 担当幹事をお願いしておく必要があります。編集委員会の構成についても、委員の交代を図ること、投稿数の増加に対処するため現行の体制を変更し、Associate Editor を置いて業務の分担を図ること、これまで旧 Japanese Journal of Physiology の編集委員会規定を援用して運営してきたが、投稿分野の変化などで無理が生じていることが指摘されました。雑誌の経営面でも日本生理学会の財務に寄与できる存在となるよう、アメリカ生理学会や日本神経科学学会の運営を学ぶ必要が指摘されました。この点については、2013 年生理学会大会長石川義弘先生が San Diego の EB Meeting でアメリカ生理学会の状況についてご調査下さることになりました。体力医学・運動学分野からの投稿の増加に応じて関係領域の委員を増員しましたが、今年から体力医学会が The Journal of Physical Fitness and Sports Medicine の発刊を決定し、少なからぬ編集委員が重複して総説・原著の依頼論文を多数求めていることから、今後の協力関係を考える必要があるとの発言がありました。

その他利益相反の有無について、利益相反委員会の結論を待って、各論文の文末の適切な場所に記載すること、ミスコンダクトの回避のために、現在全共著者から corresponding author を経由せず、Springer に直接確認の e-mail の返信を求めていること、審査途上で二重投稿や不適切な画像処理が発見された事例と対処について意見を交換し、今回の編集委員会を終わりました。

(JPS 編集委員長 佐久間 康夫)